

19

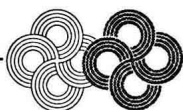
筆の御霊 田沼善一
東牖子 田宮仲宣
嗚呼牢草 田宮仲宣
齊諧俗談 大拙東華
一宵話 秦鼎著・牧墨僊編

日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成 第一期 第十卷
昭和三年一月三十日発行
編纂者 日本随筆大成編輯部
代表 早川純三郎
発行者 吉川半七
発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第一期〉19

昭和五十一年四月五日 印刷
昭和五十一年四月二十日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五（代表）
振替口座東京〇一二四四番

製作 株式会社 たんちょう社

解題

本集には、筆の御霊、東瀛子、嗚呼矣草、齊諧俗談、一宵話の五種を収める。

筆の御霊 三卷

田沼善一たぬま ぜんいち著

本書は、武器、衣服、器物、家具、風俗などの考証は、古書のみでは鮮明を欠くとして、古書と共に古画絵巻物などによって、此等を明かにした篤実な研究である。本書の序文は松村堯臣という著者父子とも特に親しい人が、著者のこの企てを喜ばしい事と思い、資料をも漁ってこれを助けたと云う。然もこの資料によって著者はこの一書を成し、古人の誤説を正すこともあり、古昔の物の実体も明瞭になった。先ず本書の成った事を喜んで、賞讃の辞は見る人にまかせると堯臣は云っている。文政十年神無月晦日の序であるから、この時分に成ったものと思われる。本書にはこの三卷本のほかに二十七冊本（国会図書館）其の他があつて、冊数はまちまちであるが、写本として諸所の図書館に蔵されている。而してこの冊数の多い本は、『増訂故実叢書』二六・二九に収められ流布している。而して原本に色彩のあるものには、色彩を施している。随筆として見る場合には此の方が楽しみである。この本の方は絵図と本文とをそれぞれ分けている。三卷本の方は、絵図は本文の所に附してある。この巻数の多い本が本書の最終本の型で、本文と絵図とが分離している。冊数はとにかくとして三卷本の方は恐らく初稿本ではあるまいか。旧大成本及び静嘉堂文庫蔵の三卷本を見て類推する事である。その内容は一卷「とりすべて云事」「ちまきの鉢」から、三卷の末「舟のさま」「むしたれ笠」に及ぶ二十

九条に分れている。但し巻頭のとりすべて云事には、絵は一まとめにする由が記してあるから、これは冊数の多い方に附すべきものかと思われるが、著者の緒言として巻頭に置いたのであろう。この三巻本の方は、『随筆文学選集』、旧大成本一期十巻によって活字本として流布している。旧刊大成本は関根正直博士の蔵本に拠ったが、本書再刊に当っては、国会図書館蔵彩色の三巻本を校合本として使用した。

田沼善一 一に篠原氏と云う。善富の子でえびのやと号した。江戸の人で、小山田与清の門人で、故実家であり絵をよくしたとばかりで其の人を詳にしない。高田与清著「歌詞考」に藤原善一筆の絵がある事が私の手控にある。歌詞考は「みたまのふゆ」以下「はし鷹のこもつちごゑ」に至る八項の考証で、文政九年七月の刊本である。それから同じく与清著「三絃考」は文政九年六月の刊行、これに「門人間宮升芳 林堯臣校」とある林堯臣は、或は本書の序を草した松村堯臣ではあるまいか。もしそうだとすると同門と云う事になる。与清の門人等ももう少し調査の必要があろうか。間宮升芳と間宮永好と兩人があつて別人とわかりながら、文字などを見ると実にまぎらわしい。

東とう 瀾らん

子し

五巻

田た 宮みや 仲なか 宣のぶ 著

本書は、陰陽五行論や京阪地方その他諸方の風俗伝説、言語、文学等何となく書き集めた漫録で、其の博識は認められるが、ややこなれ切れない硬さがあるのは一寸物足らぬ感がせられぬでもない。著者は当時著述のほかに儒医として講説をし、徒を集めて生活の資としたようで、大阪にては一応認められ交友も多かったかと思われる。本書巻頭に序を草しているのは馬田昌調（号天洋）と云う医家で詩文をよくした人である。玉林晴朗著『蜀山人の研究』によると親戚のような親しさで交つてい

たと云う事で、其の友人として田宮仲宣も親しい交りを結び「所以者何」は南畝が問い仲宣が答えた大阪の庶民生活を知る一文献であると云う。本書は新写本ながら現在中央図書館の加賀文庫に収められている。東瀛子には桐江と云う人の享和元年の序がもう一つ附してある。これには「友人田仲宣、宿学篤志、該通古今、則雖瑣言片辞、未嘗欺人云々」と云っている。当時友人間に其の言説の重んぜられていた事が察せられる。本書巻頭を見ると昇平の化に侈る民の難有さを述べ、次いで「復古の学、復古の歌を流行せり。これを見るに、多くは擬古なるべしといえるも嗚呼なり。大体贗古の者多しかや」と云っている。これは其の父全延が芝山家の門人であった事などから、堂上派の歌調なども身につけ、其の立場から真淵一派の古学を評したものとしてよからうか。伴蒿蹊等のように契沖は尊重するが、真淵は議すべきものがあるとする意見もある事であり、仲宣の意見も一応注意すべき説と見てよからうか。悪口を云っている次手に、本書には半時庵淡々について記している条が二三ある。これも亦伯父蘭中なる人が半時庵社中であつた事が本書中に見えるから、其の消息に細しかったのである。これは一寸目に留つた一二を抜いて見たのであるが内容は豊富で雑多で、和漢古今に亘り百五十余目にわたる考証と説話である。なお本書の挿画には、薊関月の門人である大阪の画家丹羽桃溪（文化五年十月歿）其の他の人々の絵が見られるが、十四歳童、田春林画とあるのは、仲宣の男田宮禎藏の筆である。これは肥田皓三氏の示教である。本書末尾に木村兼葭堂の跋文がある。依て「兼葭堂日記」を見たら、享和元年九月十九日の条に「田宮由藏」と其名が見えていた。本書は享和元年四月官許、享和三年正月刊行せられているが、のち橘庵漫筆前編とし、嗚呼矣草を第二編として刊行している。刊本は諸所の図書館にあるが活字本としては、『日本随筆全集』一、旧大成本一期十巻に収められている。本書再刊に当っては、国会図書館蔵「橘庵漫筆」十巻本により校合を加えた。

鳴呼矣草 五卷

田宮仲宣 著

本書は東牖子の続編で、橘庵漫筆にも収められている。本書出版と書名のことは、東山投林居主人（左近衛將監下毛野朝臣敦光）という人の序文によって、座右の隨筆数十卷を、書林に乞われたが、東牖子を出したのさえ鳴呼の業なりと断つたのを、傍から取なして書林に渡した、依てそのまゝ鳴呼矣草と名づけたとわかる。もう一つの国栖雷（聖護王府侍臣）と云う人の序には橘庵の読書好のことを云い、この書はほんの余事で、日記数千言細大不摂と云うものがあると云う。或はこの日記の方が更に後世を益したかと思われる。本書は確かに東牖子の続編と云う読語感がある。前編にある硬さが薄れているが、これは少々平俗である。但し内容は例の如く、第一巻の「泰平蒼生」から第五巻の「随縁陰徳」に至る百三十二条である。こゝには本草のこと、中華の事、食物の事、歌人俳人の逸話など東牖子と同様に雑多である。一例を挙げれば、「似た山」と云う言葉は元来武州秩父絹に似せた織物で、上州新田山の産で粗品である。此から似て非なる物を新田山と云うというのがある。この説は、『近世風俗志』（喜多川守貞著）にもあって、今は亦人に知られているものであるが、私は富山の鍛冶屋の老人で稲垣徳兵衛老人が人を罵るのに「何だ此ニタ山」と云うのを実際に聞いた事があるので、一寸懐かしい思いがした。老人今はもう故人である。菊岡氏の世事談の沢庵漬は沢庵より古き香の物で沢庵の初められたと云うは誤りであること、其の他秋斎筆記も引いて香の物を論じ、多田義俊英雄人を欺くものとしている。連歌や歌の話も前編同様あるが、食物の話のついでに、饅頭や宗二のこと、又節用集が其の手に成った事などを記して、この項を終りたい。本書の再刊に当っては内閣文庫本「橘菴漫筆第二編」により校合等を加えた。

田宮仲宣 名は純また悠、字は仲宣、通称由蔵、別に楚洲・楚秀・東隅子・橘庵と号し、普通に盧

(勝嶋氏を称す)

橘庵で通っている。京都の人、家は呉服商、父は全延(芝山家門人)。原田越斎、久米訂斎の門人。天明五年洒落本「粹宇留理」を出したのが作家としての門出であつたらしいと云う。これが大阪に移居してからの作である。次いで「短華蕊草」(天明六年)「寒暖寢語」^{和漢}「重宝記」等の本が刊行され作家生活が始つた。家の業は廃止してしたのである。肥田皓三氏の「蕪坊の手紙」の注記によると、盧橘庵居を移すこと天明六年から文化六年迄十一度に及んでいると云う。馬琴の知人簿には、享和二年の条の書入に「一京四条通室町東へ入北側(小川三条下ル町也)田宮由蔵殿」とある。馬琴は盧橘庵と共に正慶尼を尋ねている。然し寛政の末には大阪に居て、雑筆家として生活し文政五年「愚雜俎」の序を草してより以後の消息が明かでないが、「愚雜俎」の上梓を見た天保四年には、恐らく歿していただであらうと云う事である。その歿年等のさだかでないのは誠に残念である。この一文を草するにも中村幸彦氏稿「短華蕊葉」(『近世作家研究』所収)及び肥田皓三氏稿「蕪坊の手紙」(大阪府立図書館紀要「第八」)に拠る所が多い。中村氏の稿は、初期の盧橘庵について、肥田氏の稿は晩年の盧橘庵の生活等を考える重要資料である。なお、日野竜夫氏稿「偽証と古代学」(『文学』昭和五十年十月号所載)も仲宣を知る好文献である。田宮仲宣に興をもたれる方は是非一読すべきものであらう。

斉 諧 俗 談 五 卷

(おおひ) 大 肚 東 華 著

本書の自序に、梁呉筠所著斎諧記者、載^{セラル}怪異^{ミヤ}書也。云々と本書の命名を説明しているが、この書は斎諧記であつて斎は誤植である。本書の跋文を草し、挿画をした亀山は正しく斉諧俗談を書いている。版本の誤植である。人は多く好奇心の強いものである。怪異奇談は一応興味を持つことは自然で

ある。依て怪力乱神は語らずと云って、多く古書などから集めたこの資料を発刊することを拒んだのであるが、世上の虚妄の談でないからよからうと屢々乞うにまかせて、上梓したとある。然しそこに本書のよさと共に物足りなさが感ぜられるようである。今唐書だの五雜組、西京雜記さては日本書紀、和漢三才図会、古今著聞集等々の諸書を手許に置いて奇談を集める事は大変であるが、案外流布している本ではあり、読者に其の奇異が迫る所が少ない。本書中には勿論寺社の縁起や著者の見聞も多くあるとも思うが、全体として生々とした感覚の薄れているのは止むを得ない。時には「男変女」の条の注に「按ずるに、奇異雑談は、天文十年、中村豊前守の子息著述なり」云々と云う記述も見える。この「奇異雑談」は珍本ではあるが、現在は吉田幸一編『近世怪異小説』中に収められ、巻末には十頁にわたる解説がある。詳しくはそれを見られたい。齊諧俗談の平板を破っているのは、跋文を草している亀山と云う人の挿画である。此は品位もあり、ゆっくり見ても楽しめる。もう一つ私の興味を引いたものに、

後編齊諧俗談

五冊 嗣出

宝曆八戊寅年正月

東都書林

麻布谷町
本石町通十軒店

彫工 町田平七
大坂屋伝兵衛
大田屋庄右衛門

とある事である。この後編は刊行されたか否かは私は知らないが「町田平七」なる刻工の名の見える事である。恐らくこの齊諧俗談もこの彫工が刻したものであろう。この町田平七は、宝曆九年には長雄耕雲の「長雄書礼集」を刻して居り、「化大居座後座 画師鳥居清倍印 鳥居清満印」なるものに、「彫工町田平七・上村平吉・橋本定七」とその刻者の名を連ねている。其の他数種の本の刻者として知られている。

著書に本屋の名前はあっても刻者の名前のあるのは少ない。此も亦調査の必要を感じる事である。
著者大拙東華に就いては、一向に其の人を詳にしない。旧刊本の凡例に江戸の人とあるが大方の示教を希う事である。

一 ひと 宵 よ 話 はなし 三卷

牧 まき 秦 はた 墨 ぼく 鼎 かなえ 僊 せん 著
編

本書は、流布本に牧墨僊の絵があり、尾張 牧墨僊輯梓とある事によって、従来墨僊の編者とされて来た。而して活字本として流布した日本随筆全集本も旧大成本も皆この絵入本を原本として刊行された。森銑三氏は市立名古屋図書館で、本書の初版と見るべき、この挿画はないが江戸の葛西因是の序文のある一本を見られて、雑誌「古本屋」六号に寄稿せられ、本書が秦鼎の著なることを報じておられる。昭和三年である。其の後その稿は追記二条を加え、昭和十七年「典籍叢話」に収められ、更に『森銑三著作集』の十一巻に収められているから閲読に便利である。其の因是の序文に、館柳庵から此著を呈せられて、序を乞われたとある。この序によって、秦滄浪の著である事がはっきりするのであるが、幸いに初版本は見られなくても、静嘉堂文庫の題簽には一夜話とあるが、巻頭には一宵話とあり、墨僊の絵もあり、また葛西因是の序文もあるので再刊に当っては序文をこの本で補う事にした。本書には、巻一序、巻二序と云う自序があり、三巻末に天錫道人の文化七年の跋がある。内容は一卷「草薙神劍附玄上琵琶」に初まり、三巻末の「婦人不妒」に至る三十七条であるが、そこには、唐紙のことあり、蝦夷の事あり、ここには義経の話も出て来たり、書談あり、酒泉の条には、「塩地と酒泉と、いづれ勝れる。額田女王に論ぜさせし」などと云う気易さで文を遣るが、内容如何にも質

実で著作其人を思わしむる好随筆と思われる。以上の条項の末に、今一文「北地の大寒国へ到らむ人々に伝へて、益なる事を左にしるす」なる一文が加えてある。これは文末に「乾田一卜二口三樽散人」の署名があり不明であるが、この文章の処が文字も変り、匡郭もやや大きくなっている、此部分だけに刷ったものらしく、或は「北征人必要書」と云う書名があったかと思うと森氏は記して居られる。而してこの著者の蝦夷に就いての智識は友人近藤重蔵より得る所が多かった事を、松浦武四郎が尾張藩の水野正信に送った手紙によって明かにして居られる。

秦鼎 字は士鉉、滄浪、夢山等と号した。美濃の人峨眉の子である。峨眉は服部南郭や細井広沢の門人であった。滄浪は尾張侯に仕え明倫館教授にまで至ったが、のち辞して悠悠自適して一生を終った。古書の校勘の学を好み、春秋左氏伝以下多くの書の校勘に従った。所謂著書としては本書のみである。樹碑を好んで、埋れた史蹟の顕彰につとめたと云う。其令名各地に伝わり、頼山陽をして、「尾張藩には、よい学者を持っている。康熙字典の必要がない」と云わしめたと云う事である。交友は多く、亀田鵬斎、塙保己一、立原翠軒、蒲生君平、近藤重蔵、本多利明、秦檜丸、賀茂季鷹など枚挙に遑がないほどである。晩年風疾を病み臥して、寛政三年九月十二日に歿した。享年七十六。名古屋市熱田区新尾頭町妙心寺に葬せられた。

牧墨僊 名は信盈、俗称は新次郎、登、助右衛門等と改めた。雅号は月光亭、北亭、百斎、墨醉山人。喜多川歌麿門人時代歌政、のち葛飾北斎の門人となり甚だ親しかった。名古屋に浮世絵の根を下したのは此人であった。絵本の挿絵や自刻の銅版絵挿画がある。名古屋藩士、文政七年四月八日歿す。享年五十。名古屋市中区裏門前町万松寺に葬る。

目次

筆の御霊	一
東牖子	二九
嗚呼矣草	一七
齊諧俗談	二五
一宵話	三五

(解題 丸山季夫)

筆の靈

ふみゝるは何のためにといふに、ものしるべき為になんあるを、しかゞの世には、しかゞの事有しといふことは、呉竹のよゝの事しるせる跡によりてしるべし。しかゞの詞は、しかゞの事なりと云ことは、あらたまの其時々のかな書見てしるべし。さるをものゝかたちにかゝれることは、国郡海山の如きも、国かたにあらでは知り難く、詞にのべたるは、そこに山あり、其山下に東に川あり。其あはひを、と行て又かく行くぞと、細かにかけても、猶人の心にあきらめも、えよくもこゝろえらるゝ如くはさとされぬ物なり。まして人の姿、家のさまなどは、之を人に伝へしらせんとかまへても、書尽しがたきを、さもなくかける書どもの詞につきて、かむがへあきらめんとすとも、いかでか明めえてん。しばらくそのふみを捨て、ゑに付てみれば、いとさやかにたしかに、違なく疑なくしらるゝを、なほ古をしらでは、其名、その物をわきがたき事多かるべし。こゝに篠原善一ぬしは、其父善富の翁と共に、おのれ堯臣、おのが親与住知雄といとしたしくて、心へだてぬ友なりけり。さるはとく右のくだりに云るところをよく心得て、いにしへぶみどものかぎりよみとくいとま、又古き画どもをあなぐりもとめて見られけるを、おのれおむがしきことに思ひて、画どもの其考にとりつべき物をあさり出て、助にもせばやとこそはなせりし

か。今かくその書なりぬるを見れば、さきにいまだ人のしらぬ事ども、人の説誤れることどもつばらかにて、はた古をしり、うたがひをはるかす事いと多かり。まことや古人の筆のみたま善一「イ主に魂ちはひして、よしかづぬしの筆」のみたま、又よに玉ちはひするものになんありける。はらからとのみおもひとれるひとの、勤たる筆のいそしの、先かく成れる事よろこび、着しゑのよろこばしく、橋わたせる画のはしがきをするすもの也。こゝにほめのゝしるわざ世にふりにたれば、ほむる詞は、この書みん人の口にゆづりて、今はいはず。

文政十年神無月つごもりの日

松村 堯臣

目次

一之卷

とりすべて云事

ちまきの鉢

ひも鏡

矢立の硯

童の髪、むかばき、はぶき

二之卷

こはいひ食ふさま

破ひはだもかう

伏たる女の髪

かなもて物けづる形

三之卷

尼のすがた、又蛛切丸

あぼしきて臥るさま

九

長もちのからひつ

二

鷹すゑたる状

三

ゐ笠

六

立楽

六

三

とのゐ物の袋

六

袋法師画詞のこと

四

かけ帯また女の帯

四

三

三

角だらひ

五

あま皮からかさ

三 四 四 三

四 四 四

四 五